

## HANDS Jr.の取り組み

HANDS Jr 代表 国際学部4年 アギーレ ナルミ

## 1. HANDS Jrの誕生と現在

HANDS Jrとは、HANDSプロジェクトを裏方で支える学生団体である。正式な発足は2013年の4月になるが、外国人児童生徒教育に関心を持つ国際学部の学生が中心となって、発足以前からHANDSプロジェクトの活動に尽力してきた。

HANDS Jrの誕生は、およそ10年前までに遡ることができる。2010年に開催された「子ども教育フォーラム2010」(以下、フォーラム)に、学生有志が参加したことが始まりであると言われている。フォーラムには、外国にルーツを持つ学生が多く参加し、HANDSプロジェクトの活動に共感していたという。正式に「HANDS Jr」という団体は設立されていなかったが、学生とHANDSプロジェクトコーディネーターの船山千恵さんとの関わりもあり、HANDSプロジェクトへの陰ながらの支援が始まった。そのような中で、次第にHANDSプロジェクトや外国人児童生徒教育に対する関心が学生の間で広まるようになる。その学生の多くは、何かしら外国にルーツを持つ学生や、外国にルーツを持つ人と関わったことのある学生、そして田巻教授に関心を持っていた学生であり、彼らがHANDS Jrの前進となった。そして、2013年に正式にHANDS Jrが発足した。

HANDS Jrの前身となった有志の学生の集まりから10年。これまで多くの学生がHANDS Jrとして、HANDSプロジェクトの活動に関わってきている。現在(2020年5月時点)HANDS Jrには、国際学部の学生を中心に37名が在籍している。このうち、10名程が外国にルーツを持つ学生で、国は中国、ブラジル、ペルーの3カ国である。また、教育学部や農学部といった他学部の学生も、少数在籍している。過去には、他大学の学生から協力を得ていた時代もあった。このように、HANDS Jrは国際学部の学生を中心とした学生団体ではあるが、学部や大学を越えて、多様なルーツを持つ学生が集まる場である。そもそも、HANDS Jrに多様な学生が集まる理由に、宇都宮大学国際学部の特徴がある。それは、あらゆる場所から様々な年齢、経歴を持った人々が集まるという点である。地元の栃木県は元より、北は北海道から南は沖縄県まで全国各地からの学生が集まる。その中には、日本人学生はもちろん、帰国子女や社会人、他大学からの編入学生、外国にルーツを持つ学生、外国人留学生、あるいは、国籍は問わず外国に何らかのつながりを持つ学生など、多様な背景を持つ学生で構成されている。また、2016年度入試より、「外国人生徒入試」という日本の高等学校で学ぶ、日本語を母語としない生徒や外国人学校で学ぶ生徒を念頭に置いた特別入試が開始され、これまで以上に多様な背景を持つ学生が増えている。

話は戻るが、先ほど述べた通り、「多様性」という国際学部の特徴から、多様なルーツを持つ学生がHANDS Jrにも自然と集まる。外国人児童生徒教育に関心を持つ日本人学生や、日本で生まれ育ち日本の教育を受けた外国にルーツを持つ学生、学齢期に来日した外国にルーツを持つ学生、日本の外国人学校で教育を受けた学生、国際結婚家庭で育った日本人学生、そして高校時代に留学を経験した日本人学生など、様々な生い立ちや来日経緯を持つ。また、その中には、実際にHANDSプロジェクトに助けられた学生(元外国人児童生徒)も多くおり、HANDSプロジェクトに大きな関心と熱意を持って、活動に協力する学生も少なくない。当事者以外の学生は、外国にルーツを持つ人との関わりがあった学生や、大学に入るまで外国にルーツを持つ子どもたちの存在や抱える問題を全く知らなかったという学生までも在籍している。このように、外国にルーツを持つ学生だけではなく、様々な人を巻き込んで、現在まで、HANDSプロジェクトの裏方として「外国人児童生徒教育支援」に取り組んできた。

## 2. これまでの取り組み

HANDS Jrは、HANDSプロジェクトを通して、これまで多岐にわたる活動に取り組んできた。HANDSプロジェクトの運営補助をはじめ、学習支援や国際理解教育の実践、外国にルーツを持つ子どもたちとの交流、周知活動、異文化交流などである。今回ここで取り上げるものは、HANDS Jrの活動の中でも特に主だったもの、そしてこれまで継続的に行われてきたものである。これまでの活動を大きく4つに分類し、各項目に分けてこれまでの活動をここで振り返りたい。

## ①HANDSプロジェクト運営補助

## 「多言語による高校進学ガイダンス」

HANDSプロジェクトの数ある活動の中で、代表的なものと言えば「多言語による高校進学ガイダンス」(以下、ガイダ

ンス)である。本ガイダンスは、高校進学を検討している外国籍の、あるいは外国にルーツを持つ子どもと保護者に、日本の教育制度や高校受験、奨学金の仕組みなどの情報を提供することを目的に行われている。HANDSプロジェクトが発足した2010年から始まり、宇都宮市をはじめ、真岡市、栃木市、大田原市、那須塩原市などで開催されてきた。対応言語は、英語、ウルドゥー語、スペイン語、タイ語、中国語、日本語、フィリピン語、ベトナム語、ポルトガル語の9か国語にわたる。

ガイダンスにおけるHANDS Jrの役割は、関係各所への資料発送や会場準備、来場者の受付、相談内容の記録、通訳、司会、体験談発表等の運営補助である。毎年、多くの参加者が集まるため、HANDS Jrの協力は欠かせないものとなっている。特に、外国語能力を必須とせずとも協力が可能であるため、HANDS Jrの中でもより多くの学生がガイダンスの運営に関わることができるイベントの1つであるだろう。当事者である外国にルーツを持つ学生に関しては、通訳や体験談発表で活躍する場となっている。一方で、当事者ではない学生にとっては、外国にルーツを持つ子どもたち一人一人が抱える問題や不安を肌で感じる場となっている。以下は、実際にガイダンスに参加したHANDS Jrのコメントである。

◆ 私が多言語進学ガイダンスに参加し感じたことは、栃木県内に本当に様々な国から日本に来ている人々がいる、ということ。それぞれの人達が、言葉の通じない中で進学などの受験を考えることはどれだけ不安だろうか、と感じました。しかし、相談に来る子供たちの多くは進学に前向きであり、熱心に話を聞く姿にこのような活動に参加してよかったと心から思いました。

また、私の住む場所にはこのような活動はおそらくありません。同じように進学したくても勝手がわからず、うまくいかない子供たちがいると思うと、このような活動はとても意味があり、もっと行なわれていくべきではないかと思いました。

これから海外から来る人たちがその子供たちが増えていく中で、外国人生徒たちが抱えるこの問題は非常に大きいものであると感じました。(国際学部3年Kさん)

◆ 多言語進学ガイダンスに参加して思ったことは、通訳をしてくれる人や、直接試験に関わる先生方がいることによって、正しい情報を生徒が獲得できるという点です。親御さんの出身国によって進路に対する考え方や日本の高校進学、大学進学の方法を自国のものと同じだとおもってしまっている方がなかにはいるため、まずその誤解を解くことから始まり、進路に対して悩んでいる生徒に対してその人個人にあったアドバイスができることから、進路に対する不安も少し和らげることができる重要なガイダンスだと思いました。(国際学部4年生Tさん)

ガイダンスの大きな目的は、日本の教育制度や高校受験に関する正確な情報を提供することにある。しかし、それだけではなく、これまでHANDS Jrが関わってきたことにより得られてきた効果が2つあるのではないかと考える。1つは、当事者として同じ立場であった外国にルーツを持つ学生の参加により、不安を抱える子どもやその家族との交流・意見交換の場としての機能を果たしていることである。このように考えるのは、ガイダンスに参加する多くの相談者は、ロールモデルの不在により、高校受験や大学受験、あるいはその先のキャリア形成を見据えることが困難な状況にあると考えるからである。金銭的な問題があるのであれば、同じ状況にあった学生はどのような方法で解決したのか。高校の専門課程に進学すると大学進学は難しくなるのか。このような相談に対して、本ガイダンスでは当事者の生の声を聞くことができるのではないだろうか。日本における教育制度を理解し、高校を受験することの意味を理解し、そして実際に同じ外国にルーツを持つ学生と交流することによって、ライフコースを見据えるための過程となっているのではないだろうか。

一方で、当事者以外の学生に関しては、外国にルーツを持つ子どもや学生の存在を周知する役割を担っているのではないだろうか。先にも述べたが、宇都宮大学の国際学部は多様な学生で構成されている。しかし、意外にも外国にルーツを持つ学生の存在は、あまり知られていない。そもそも、日本に生活基盤を持つ「外国人」に対する認識は、「住民」「市民」といったものとはかけ離れている現状がある。ガイダンスを通して、外国にルーツを持つ学生による体験談や、様々な不安と悩みを抱える子どもや保護者の声を聞くことは、その存在を知り、身の周りに転がる問題を実感することはもちろん、日本の一住民として生活する外国人を認識することにつながっているのではないだろうか。そして、その周知が、様々な人に普及されていき、小さな力からがやがて大きな力となる。その一助になっているのではないだろうか。

ガイダンスにおけるこれまでのHANDS Jrの取り組みは、ロールモデルとの出会いの場、そして当事者以外への周知

につながっており、HANDS Jrや宇大に在籍する外国にルーツを持つ学生と、外国人児童生徒教育に深い関心を持つ学生の協力があってこそ実現できていることだと考える。

## ②学習支援

### AMAUTA真岡市国際交流協会スペイン語母語保持教室

「AMAUTA」とは、真岡市国際交流協会スペイン語母語保持教室のことである。真岡市には、南米系の外国人住民が多く、特にペルー人が多い集住地域である。そのため、参加する子どもたちはペルーにルーツを持つ子どもがほとんどであり、下は4歳から上は15歳までと幅広い年齢の子どもたちが集まる。AMAUTAの子どもたちには、ペルーという1つの共通点はあるが、日本語能力をはじめ、来日の時期や文化的背景は実に多様である。日本語が堪能な子どもや、小学校入学前までまだスペイン語の方が強い子ども、どんなにスペイン語で話しかけても日本語でしか受け答えをしない子どもなど様々であり、見学しているだけでもとても興味深い観察ができる。しかし、基本的にはどの子どもも日常会話としての日本語は堪能であり、意思疎通に困ることはほとんど無い。

普通の教室では、子どもたちの母語であるスペイン語、あるいは両親から継承したスペイン語や、母文化の保持を目的として、保護者による母語保持教室が開かれており、今年で8年目を迎える。一方で、子どもたちの夏季休業期間になると、HANDSプロジェクトの活動の一環として「AMAUTA」を訪問し、夏休みの宿題の支援が毎年行われている。開催時期は、7月下旬から8月上旬にかけて全5～6回、夜の時間帯に行われる。支援方法は、小学校の低学年、中学年、高学年、中学1～2年生、受験生の5つのグループに分け、4人から6人の子どもに対して1～2名のボランティア学生が付いて支援するという形である。「AMAUTA」の子どもたちは、基本的には日本語での学習支援が可能であるため、外国語や学習指導の経験が無い学生でも支援が可能である。したがって、誰でも協力できる学習支援の1つである。

日常会話としての日本語を堪能とする子どもたちではあるが、学習となると、漢字の読み書きや、設問の理解、国語の文章読解などを困難とする子どもたちがほとんどである。外国人児童生徒教育問題が語られるとき、しばしば「学習言語」が取り上げられるが、AMAUTAでの支援を通して、その現状を目の当たりにするボランティア学生は少なくない。以下は、実際に学習支援に参加した学生のコメントである。

何かを教えることの難しさも改めて学びました。子どもたちの中には、日常会話としての日本語に不自由がなくても、学習のための日本語になると理解に苦しむ様子が見受けられました。そのような子に対して、どのように教えたらよいか、どうすれば分かりやすくなるのか、とても悩みました。

そうして試行錯誤しながら学習支援をしているうちに、私はAMAUTAの子どもたちから学んだことがあります。それは、人と接するときには、1つの考え方にとらわれてはいけないということです。日本語がわからないから学習に支障をきたしている、外国人児童生徒であるからできない、このような理由だけで彼・彼女らと接することはあまりにも理解に乏しいと思います。子どもたちの背景には何があるのか、今どのようなことに興味を持っていて、何に対して悩んでいるのか。そこまで考えることで、子どもたちとの繋がりを深いものにできると活動を通して感じました。

(HANDS next 22号「『AMAUTA』の子どもたちから学んだこと」より抜粋)

「私が担当したのは、小学3年生の男女6人の子ども達でした。初めて会ったときは、相手も私も緊張気味で、打ち解けるのに少し時間がかかってしまったように思います。どの子も日本語が堪能で意思疎通に困ることはありませんでしたが、学習となると、漢字の書き取りや読み取り、擬態語、国語に文章読解問題、算数の文章題などを難しく感じているようで、たくさんの質問を受けました。長文問題は、そもそも長い文章を読みたがらない様子で、どこをどう教えたら良いのか分からず苦労しました。また、一度に6人分の勉強を見るとというのは、ひとりひとりにじっくり時間をかけて教えてあげることができず、少し残念でした。

最初は警戒するように静かだった子ども、少しずつ打ち解けることができ、後半は好きなことを話したり、新しく覚えた言葉を教えてくれたりしました。些細なことでも、子ども達がいろいろな話をしてくれてとても嬉しかったです。ある女の子は、自分からよく使い込んだスペイン語の辞書を見せてくれました。よく勉強しているなと感心していると、「家でパパと話すときに使うんだよ」と教えてくれました。親の話している言葉を覚えていった自分には、そこまで考えが及

ばなかったことを恥ずかしく思うと同時に、スペイン語教室の意味を考えさせられた一瞬でした。

子ども達を見ていると、一生懸命勉強しようとしている子もいれば、仲の良い友達同士でおしゃべりに夢中な子もいました。しかし、どの子もこの場所に来て勉強したり友達に会ったりすることを楽しみにしているように感じました。私自身は、これまで外国人児童生徒が身近にいたということもなく、大学に入るまで外国人児童生徒の問題を深く考える機会もなく、経験のない自分に何ができるのかを考え、活動に参加するまでは、うまく教えられるか、子ども達と仲良くなれるかなど不安もありました。しかし、実際に子ども達と接して、経験の有無に関わらず、どんなことでも挑戦する姿勢が大切なのだと思えました。これからは、広い視野を持って、自分にできることは、たとえ微力であっても、子ども達の力になれるように、継続してやっていきたいと思いました。

(HANDS next 14号「真岡市スペイン語教室『AMAUTA』学習支援活動報告」より抜粋)

このように、AMAUTAにおける学習支援を通して、参加学生は大きな学びや気づきを得ている。特に、外国にルーツを持つ子どもたちが、「日本語ができない子ども」というネガティブな側面で見られていない点で、そういったものを省いて、1人の子どもとして向き合うことや、子どもたちの背景に目を向けることを通して、1つの考え方にとらわれない多角的な思考を養うきっかけになっているのではないだろうか。「教える側と教えられる側の関係性」を持ちながらも、1人の子どもとして向き合うことができるということは、1人の人間として同じ目線で接することができるということである。比較的子どもたちとの年齢が近いHANDS Jrの学生であるからこそ、学習支援を越えて子どもたちを本質的に知るという1つのアプローチにもつながっているのではないだろうか。

## ③国際理解教育の実践

### 子ども国際理解サマースクール

毎年夏に、宇都宮市教育委員会東生涯学習センターとHANDSプロジェクトの協働で「子ども国際理解サマースクール」が実施されてきた。宇都宮市内の小学4年生から小学6年生を対象に、ゲームや外国にルーツを持つ学生との交流を通して、相互理解や国際的な感覚を養うことを目的とした事業である。この活動は、HANDSプロジェクトができる以前の2009年より今日まで継続されており、年によっては応募者に対して抽選をせざるを得ないほど人気があるイベントである。参加者からは毎年高い評価を受けており、レポートして毎年参加する子どもも多い。

この活動の大きな特徴は、HANDS Jrが主体で企画・準備・運営を行うことにある。本格的な準備は5月ごろから始まり、担当の学生を中心に進めていく。テーマや目的をはじめ、どのような国を取り上げるのか、またどのような内容にすれば子どもたちにわかりやすく、そして「外国」を身近に感じてもらえるのかなどを学生が考えていく。また、子どもたちには、なるべく多くの国の人と交流をしてもらえよう、本学部の留学生の確保も学生によって行われる。講座は基本的に、「参加型講義」と「国際交流」の2つで構成され進められていく。参加型講義では、1つの国や地域を取り上げ、子どもたちに理解を深めてもらうものである。例年の参加型講義は、1つの国や地域をテーマに1日を設けていたが、開催日数の変更により、昨今では、一度に3～4カ国の国を取り上げている。その一方で、国際交流では、実際に外国人学生や外国にルーツを持つ学生とゲームを通して、国際感覚を養ってもらうことを目指す。また、単に外国人と交流するだけでなく、そこに「外国人児童生徒」が経験する異文化を劇にして取り上げたり、外国人学校に通う子どもたちとの交流を取り入れたり、身近な外国にルーツを持つ子どもの存在の周知をも取り入れた、HANDSプロジェクトならではの国際理解教育にもなっている。

この事業での一番の収穫は、「国際理解教育の実践」という1つの活動が、参加学生と子どもに相互的な学びを与えることにあると考える。今日のグローバル化により、子どもたちが日常で外国人や外国の文化に触れる機会は以前よりも増えている。しかし、「違い」を体感できる場はまだまだ少ない。その点で、特にブラジリアン・スクールの子どもたちとの交流は、その「違い」を子ども同士という同じ目線で体感することができる重要な機会であったと考える。教育現場における国際理解教育の実践が重要となる中で、英語教育の推進など英語圏や欧米諸国に対する異文化理解の活動が増えているものの、身近なアジアや、歴史的につながりが深い南米といった欧米以外の諸外国に視点を置いた活動は少ない。そのような中で、栃木県内の外国人の特色とHANDS Jrをはじめとする宇都宮大学生の多様な人的資源を活用し、「栃木の中にある外国」という最も身近な外国人の存在への周知につながっているのではないだろうか。加えて、学生主体の企画・準

備・運営は、実践的な国際理解教育を経験する貴重な場となっており、国際理解教育の担い手の育成につながっており、相互的な学びがある活動となっている。

「外国」と言われると、どこか遠い存在に置き換えてしまいがちである。しかし、身近なところを取り上げることによって、子どもたちが世界に目を向ける1つのきっかけになりやすい。限られた時間の中で、世界の全てを知ってもらうこと、そして私たち自身も理解することは困難である。しかし、この子ども国際理解サマースクールを通して、「小さなきっかけ」を与えるという役割を、これまでの講座でHANDS Jrが担ってきたのではないだろうか。

#### ④周知活動

##### 外国につながる子どもフォーラム(2010～2015)

本フォーラムは、地域に開かれた形でHANDSプロジェクトの活動報告や、外国人児童生徒教育支援に関して、幅広く情報や意見を交換する場を提供することを目的に、2010年より開始された。現在は、形を変えての開催となっているが、長い間継続されてきた活動の1つである。第1回目は、「子ども教育フォーラム」という名称で、「グローバル化する社会において、外国につながる子どもたちのみならず、すべての子どもたちにとっての教育を、我々はどうのように考えるのか、かれらの充実した未来のために何ができるのかを、幅広く考えていきたいという期待と希望が込められ」(HANDS next Vol4, p1より)開催された。HANDS Jrは、運営補助という形で協力し、外国にルーツを持つ学生の体験談発表をはじめ、外国人学校の学生を招いた意見交換会、外国人児童生徒教育を扱った学生による創作劇、映画の上映会など、フォーラムの一部の構成を担った。

以下で、資料「宇都宮大学HANDSプロジェクト 3年間の歩み」を用いて、記念すべき第1回目の開催と第2回目の開催をまとめた活動報告書でその内容を簡単にご紹介したい。

##### 「外国につながる子どもフォーラム」の開催 ～地域への発信と相互交流～

###### ◆経緯◆

「外国につながる子どもフォーラム」はグローバル化が進む社会において、外国につながる子どもたちのみならず、すべての子どもたちにとっての教育を充実させるために何ができるかを考える場として、設けた「フォーラム」です。毎年12月にHANDS主催及び県内の各教育委員会の後援・ご協力の下、今までに3回実施してきました。

###### ◆第1回目◆

第1回目の「子ども教育フォーラム2010」は、2010年12月4日に開催し、「外国につながる子どもの教育問題を考える」をテーマに2部構成で実施しました。第1部の「HANDSプロジェクトの取り組みと課題」については、プロジェクトメンバーである「外国人児童生徒・グローバル教育推進協議会」、「外国人児童生徒支援会議」、「外国人児童生徒教育支援ボランティア派遣事業」からの活動報告がありました。それを受けて、パネルディスカッションでは行政や教員などの立場の違う7名のパネラーによる議論がありました。第2部では、「外国につながる子どもの進学問題を考える」と題して、「進学問題」を取り上げました。まず、HANDSプロジェクトが主催した「多言語による高校進学ガイダンス」の参加者内訳、実施内容、アンケート結果など、今後の課題について報告がありました。次に、子どもを高校に進学させた経験を持つ保護者による体験談発表がありました。最後に、様々な形で外国人児童生徒に関わる方を集めてのパネルディスカッションを繰り広げました。

###### ◆第2回目◆

翌年の第2回目は名称を変え「外国につながる子どもフォーラム2011」と題し実施しました。第1回目よりリニューアルした点はHANDSプロジェクトを通して外国につながる子どもたちと接してきた学生たちが企画・運営の主体となり、学生から感じた視点・考えを第1部の創作劇に表現したということです。創作劇は、3部構成となっていてどれも何気ない日常生活または学校生活を取り上げることによって外国につながる子どもたちがどのようなことに困っているのか、また、日本人にとって当たり前だと感じていることが彼らにとってはそうでないということを表現することができ、会場の皆様

に深く理解・賛同を得ることができました。同創作劇は学生のボランティアでの経験や実際の当事者の方々の体験談をもとにシナリオを構成し、同時に外国人児童生徒及び保護者、日本人児童生徒及び保護者と学級担任など様々な視点を取り入れました。劇を通して、外国人児童生徒教育の現状と課題を知ってもらえるよい機会だと考え、達成できたのだと思います。

第2部は教員向けの手引書である「教員必携シリーズ第一弾」の意義や課題を多面的に検証する試みとして、教員や本書使用者から意見をいただきました。第3部では、「多言語による高校進学ガイダンス」の現状と今後の課題について意見交換が行われました。

##### ～当時のHANDS Jrのコメント～

◆ フォーラムに学生が参加して、発信するようになると、意外にも当事者のことについて周知されていないことに驚かされるが多々あり、体験談を発表するだけでも価値あることだと感じるようになりました。外国人の子どもや外国にルーツのある子どもに対する興味関心が大人・学生に関係なく普及していく実感も湧くようになる一方で、フォーラムを通してどれだけ現状や正確な情報を共有できていたかの心配もありました。裏方で関わる学生も外国人や外国にルーツのある学生が中心だった時期から徐々に日本人も協力するようになり多様性がみられるようになりました。(元HANDS JrのKさん)

◆ 「フォーラムに参加する前までは、自分の周り(自分という接点のある外国人のクラスメイトや友達)という小さな世界でしか外国人の子どもの現状を知りませんでした。フォーラムに参加してからほかの地域やコミュニティからの意見を聞く機会が格段に大きくなったことで、より広く外国人の子どもたちが置かれている状況の多様性を知ることができました。私自身フィリピンのハーフでしたが、自分のアイデンティティと向き合う良いきっかけにもなりました。(元HANDS JrのSさん)

このように、当事者やその関係者に対する支援だけではない取り組みもHANDS Jrの1つの活動として行われてきた。とりわけ、当事者の生の声や体験を外に向けて発信できる場があることは、その発信を通して学生や地域の人々への周知につながってきた。そして、外国にルーツを持つ学生にとっては、自身のアイデンティティに向き合うきっかけにもなっている。HANDS Jrに関わる学生が、外国にルーツを持つ学生だけではなく、「外国人児童生徒教育」に何の接点もなかった日本人学生が徐々に関わるようになったのには、このフォーラムが大いに影響しているだろう。

### 3. HANDS Jrのこれからの課題

HANDS Jrとして活動していく中で、学生の間でしばしば取り上げられてきた課題がある。それは、「当事者ではない人々への周知」を、どのような形で進めていべきかということである。このように考えるのは、これまで「外国人児童生徒教育問題」の対象とされてきたのは、主に「外国籍の子ども」であったが、外国人の流入から30年以上経過した現在、外国人の定住化や国際結婚家庭の増加により、子どもたちの多様化が進んでいるからだ。つまり、国籍を問わずに、外国に何らかのつながりを持つ子どもたちが増加しているのである。これがどのようなことを意味しているのかというと、これまで以上に、外国にルーツを持つ子どもたちが、地域において身近な存在になっているということである。HANDSプロジェクトの目的の1つにもある「地域貢献」や「地域とのつながり」を大切に、これまで様々な取り組みに励んできた。しかし、そこで示される「地域」とは、教育関係者や大学の研究者、外国にルーツを持つ子どもに関心を持つ人であったりと、当事者や関係者の人々に限られてきたものである。実際に、HANDS Jrに在籍する学生に関して、国際学部がほとんどであり、なかなか他学部への周知ができていない現状がある。このような背景には、恐らく「外国人」が「住民」や「市民」として扱われていない現状があることが関連していると考えられる。「外国人と日本人」のように、分けられて考えられているのではないだろうか。だからこそ、「外国人」というキーワードがあると、どこか遠い存在で、専門的なイメージを持ちやすい。もちろん、専門的な視点は、問題改善の過程で必要不可欠なものである。しかし、それと同時に、同じ住民という視点を持つことが必要であるのではないだろうか。外国人も日本の一住民であるのだから。同じ住民という視点を持つことが、当事者ではない人々への周知につながり、地域全体の問題として包括的に考える一歩になるのではないだろうか。

私たちHANDS Jr.の中で、この課題に関する正確な答えはまだ得られていない。しかし、これまでの活動の反省点を踏まえ、今後の活動をより開かれたものに工夫しなければならないと考えている。今後もHANDSプロジェクトの活動を継続し、活動を通して地域住民はもちろん、学生への普及啓発に努めていきたい。



## 関係者からの声

